「どうしてだろう、幽かな不安を感じる。この霧に」

窓から眺め、瞑想的に呟く。

十一月、街は霧に埋もれていた。在るはずの黎明は白く塗りつぶされている。窓際にいるせいで、隙間からわずかに洩れ入る外気の、水のような冷やかさを皮膚に感じた。いよいよ深まり、やがて自らの手のひらも見ることができなくなるだろう。

古い、とても古い大都会。もし霧が晴れていても、夜など瓦斯燈の少ないこのあたりの古い石造建物群は、人を脅かすように暗鬱と聳えているというのに。

こんな日は、まるで冥府のようだ。何が起こってもおかしくない。穢れた醜怪なオークが跋扈するような戦慄を覚える。

ここは二階の角部屋。彼はその角にいる。そこは八角形を2分の1にしたような出窓のスペースで、玲央の坐るアームズ・チェアはその半端なスペースに収まっていた。まとめられた厚いカーテンに、やや隠れるような感じが好きだ。

ペルシア絨毯の敷かれたヴィクトリア様式の部屋全体を見渡す。

八騎のアームズ・チェアの群れが、炎の燃え盛る暖炉を中心に、不規則な半円を描く、その外環の最果て、辺境に、彼は位置していた。

玲央は空想する。錚々たる人物を乗せるアームズ・チェアを、猛る騎馬と見做し、荒涼たる戦（いくさ）の原野に躍り出る一群。自分はその最後尾につく、と。

坐っているのは、中心から、

真兮（まことや）・伊呬亜（いれあ）・波羅蜜斗（ばらみと）・普蕭（ふしょう）・隆臥（たかふし）・龍咒（りゅうしゅ）

という奇妙な五人の若い男と、一人の蕾のような少女。

ちなみに、真兮の真正面、小卓を挟んだ向かいの席は空いている。これから来る客人のために空けてあるのだ。

十七歳の伊呬亜が重要な席にいるのは、これから来る高貴な人物と間接的に知り合いだからだ。

玲央は振り返り、窓の外を再び見る。

彼の坐る位置は、本来なら、大通りが交差する角にあって、二つの大街路 avenue の往来をよく見渡せる場所であった。動きは見えない。

往来はなかった。この辺りに、人っ子一人いなくても、時刻を考慮すれば、何ら不思議はない。しかし、本当に動きがないかどうかは確信が持てない。何しろ、今

は、真下の歩道の瓦斯燈の照らすところが見えるかどうかぐらいだから。しかし、彼が見落としても、何ら大勢に影響はない。

いずれにせよ、客人はここに来るのだし（むろん、そうだ。向こうがこちらに会いたいと願っているのだから）、階下のエントランスでは、後輩の曇（あぎと）が案内するために、待っているのだから。

再び視線を転じてしまう。

窓の内側、窓枠が棚のようになっている。

ミニチュア・ボトルとミニチュアの古い皮革装丁本が置かれていた。真分の趣味だ。スカッチの琥珀と皮革のタン（tannin）色が做すハルモニア、存在が何かを語り合っている。

どことなく、ドール・ハウスのような、箱庭のような楽しみ。微笑ましくそう思いながらも、玲央もまた、さまざまに空想を廻らせ、楽しんでいた。

これからのことを忘れるかのように。

空想はすぐに破られた。

壮麗な馬車が停まり、礼装の随行者が恭しく扉を開けて豪奢なステップを設置し、貴人が降りて来たからだ。曇が歩道に出た。

グランドリー大枢機卿の秘書官であるウィンダー卿は太った巨漢で、絹織に先祖伝来の紋の入った高級注文服を着て、太いタイを巻いていた。彼にしてはこれでもラフな装いで、日頃は儀装の軍服に、勲章をいくつもぶら下げた姿しか庶民は見ることがない。左右には、厳めしく無表情な随行の将校が平服でつき添っていた。

「お独りでいらっしゃると伺っていましたので、席が一つしかありません。すぐに用意しましょう」

真分は詫びるふうなく、淡々と言った。

「いや、結構。

彼らは日頃から坐りません。いざというときに間に合わないからだそうです。私も密かに独りで来たかったのですが、警護部の者が難色を示しまして、遂に折れたわけです。

さて」

そう言いながら、真分を眺めた。

表情には出すまいと努めながらも、驚きを禁じ得ないのだろう。これが在野の

賢人と言われた男か、と。

何しろ、真兮の格好と来たら！

コバルト・ブルーの繻子を生地にした膝丈のミリタリー・コートに、金の紐飾りや肩飾りを附し、ロココ時代ふうの大きなカフス、一六オンス・デニムのスキニーを穿き、よれよれの蛇皮のロング・ブーツを弛ませ、細高い鼻背に片眼鏡、長い髭髯鬚をベルトの位置まで垂らし、襟にフリルのついたサイケデリックなペイズリー柄のベルベットのシャツは見えない。屋外なら、これにつばの大きなウィザード・ハットをかぶる。そんな奇妙ないでたちなのだ。

厳粛な正装の秘書官とは非常に対照的で、真剣に向かい合うほど、喜劇的であった。